



表紙の写真

雑誌「文化人」

雑誌「文化人」は、昭和28年1月創刊。提出の第32号は、昭和31年12月10日発行で、日本画家土屋義郎が表紙絵を飾っている。86ページ、定価百円。裏付けを見ると発行所は、株式会社「文化人社」で、本社は甲府市横町の一瀬邸に置き編集局に、石原文雄、露木寛、林貞夫、中沢春雨、一瀬邸の各氏が名を連ねている。敗戦の傷跡もまだ消えさらぬ昭和二十年代後半に、いち早く废墟から立ち上がりこのような総合雑誌を創刊したことの意義はきわめて大きい。露木寛の「三ツ水門」は連載中も好評で、後に同名の著書を刊行、名著の賞れ高い。昭和32年9月、第35号をもってあえなく廃刊となるが、上記作家以外にも前王徳平、竹内勇太郎、寺田重雄、飯田龍太、中村鬼十郎、清水昭三、志摩阿木夫らが健筆をふるい、後に県下文学界の重鎮となる面々がこの雑誌で育った。

(解説：奈良余美文庫 植松光宏)

【お知らせ】
MUH第21号の発行は10月1日となります。

「MUH」vol.20 1999・4・1
企画／早野グループ「MUH」編集室
策定／深沢直・矢田直生・横田雅幸・久保田充一
編集／株式会社ニュースメディア甲府
三神弘・三井君男／石原由佳子・高山ひとみ／
原田陽子／宮塚利雄・杉村聡・青木茂樹／
浅川毅・榎克明・永田宏
印刷／株式会社サンニチ印刷

誌名の「MUH」は、早野組の社訓である「和」を記したMale(仲間)・Union(結束)・Harmony(調和)の頭文字からとりました。幻のムー大陸のロマンを冒険します。

フォーラム			2
テーマ	余 暇	江宮隆之・古屋久昭・岩崎正吾・佐藤眞佐美	
対 談			
山梨21	江宮隆之氏(作家) 岩崎正吾氏(作家・出版社社長)	古屋久昭氏(詩人) 佐藤眞佐美氏(児童文学作家)	4
ホスト	早野 潔		
	日々の暮らしの宝探し		
	仕事、生きがい、感動、文化をひらく探検家たち		
トピックス			
コンピューター	「2000年問題」	宮塚利雄	10
女性セミナー			
奉仕への	「参加」と「役割」	志村康子	11
企業ウォッチング			
甲府紙器株式会社	小林 明氏		13
サークル訪問			
ママネットやまなし			14
セミナー			
都市の魅力		青木茂樹	15
インフォメーション			
早野組・トヨタビスタ山梨・トヨタホーム山梨・甲府通運			16
ようこそ歴史			
小川正子		上野晴朗	18
アートへのまなざし			
ボク的美術品観察日記13		山本育夫	20
トレンド			
ちょっと身近な海外旅行			22
BOOK	こんなところに山梨…	BOOKコーナー 「江戸の春秋」	23
滝を見るハイキング			
深沢川 平成峡の滝		上野 巖	24
甲府通運前史を訪ねる(13)		林陽一郎	25
ユーザー訪問			
ふじ寿司			26
お家発見			
小林 敏彦さん			27
リレーエッセイ			
実体のある町について		清水昭三	28
ときのひと・FACE			
トヨタビスタ山梨 原田 俊三さん			29
おしゃれ	オギノ リバーシティ LA FUJIYA	たべる 山田酒店	30
お茶の間の民俗学(11)			
—ふるさとの心と味(6)—		志摩阿木夫	31
コラム			
某月某日		杉村 聡	32



将軍様の花畑

江宮隆之

東京にはたくさんの庭園がある。小石川後楽園とか、駒込の六義園、浜離宮、清澄公園などなど。これらのほとんどが、江戸時代の大名屋敷だったところだ。後楽園は水戸光圀の、六義園は柳沢吉保の、といったふうに。何故かという、大名屋敷は広大で必ずお花畑を作っていたからだ。「大名屋敷にお花畑」というのは何かそぐわない感じがするが、実は二代将軍の徳川秀忠にすべての原因がある。秀忠は父・家康の陰に隠れてさほど名君のように思われていないが、江戸の町づくりはすべて秀忠の指導で行われたことや、江戸城を造ったことは案外知られていない。この秀忠には二つの趣味があった。鉄砲と花作りだ。鉄砲は自分専用の薬袋まで作らせたほどの名人であったし、花に関してはいまどきのガーデニングなんか目じゃあないほど玄人はだしだった。鷹狩りも、鉄砲でズドン。堀り道にきれいな花が咲いていれば、土ごと持ち帰って江戸城の花畑に植えかえした。そう、江戸城を造築した時に秀忠は、広いお花畑を作った。それを見た大名たちが自分たちも、と大名屋敷に花畑を作り、国表のお城にも花畑を作った。そこで珍しい花を栽培しては、秀忠に贈ったりしたのが、江戸時代の大名と花畑の関係の始まりということになる。今、発掘中の甲府城にも立派な広大な花畑があったことが、柳沢時代の城の図面に残されている。この大名の花ブームが、江戸の庶民にも広がって大流行した。そのうちに、桜の季節になると「花見」などと洒落こむようになり、飛鳥山や向島、品川御殿山などはシーズンには大にぎわい。中でも上野寛永寺は、花見の時期に限って開放した。ここでは喧嘩や歌舞音曲はご法度。「山同心」という面白い役職があって、そうした花見の客のために筵を敷いてやったり、いろいろな便宜を図ってやる役人。もちろん、喧嘩などが始まればこれを取り締まる。いわば、警察官が花見の場所取り屋をやっているようなもの。とても今では考えられないお役人様というわけだ。歌ったり、踊ったりは飛鳥山の花見だった。ここの桜は八代将軍・吉宗が江戸城内から千二百七十本を移植して、庶民のために提供した。茶屋や出店も並んで大騒ぎ。と、ここに現在の花見のルーツがあるわけだ。花見。いいですねえ。

■1940年山梨県生まれ 第13回歴史文学賞 第8回中村星湖賞受賞 「凍てつく」「白磁の人」「経済記」「カネゴンの日だまり」「小西行長」「一葉の雲」(河出書房新社刊)

余暇幻想

古屋久昭

余暇。つまり暇。余っている時間、といってもいい。「貧乏暇なし」が当たり前になってしまっている私のような者にとってみれば、余暇などという言葉も空しい響きにすぎない。あるときから余暇社会という言葉がいわれはじめた。土・日の週休2日制の定着、人生80年時代の到来、それらがそのきっかけである。そこで、余暇時間を有効に使おうという人たちが啓蒙のごとく現れ、彼らの受け皿として、リゾート産業やレジャー産業がにわかに活況を呈しはじめた。バブル経済が拍車をかけ、やがてバブルの崩壊とともに沈黙化。それでも余暇時間だけはそのままだから余暇の使い方は益々多種多様となり、余暇を楽しむ人たちは至るところに出没する。その一方の落ちこぼれ組みの方の一人が自慢じゃないが私である。もちろん私にも週2日の休みはある。確かに休みはあるが余暇という感じではない。まして暇ではない。「あれもやらねば」「これもやらねば」、つまり「ねばならない用事」の奴隷か、「ねばならない病」の重症患者か、いずれかである。かつてはそうでもなかった。年とってここ1、2年が特にひどい。雑事が溜まっては休日に始末する、といったパターンだ。余暇を活用して雑事の整理では情けない。本当の意味での余暇とはいえないのだ。こんな状態から早くおさらばをしないでほしいと思っているものの、結局は5年先の60歳定年待ちか。20代で独身といえば、一種の華。この華にあやかって、よく旅をした。日本中からヨーロッパへと。職場にも家にも、「しばらくお暇ちょうだいいたします」などと、「ウム」もいわせず、草鞋に三度笠という出で立ちまがいの格好で、しかも1週間ぶっ続けなんて当たり前で、20日間連続、1か月近くのお暇なんていうこともあった。とんでもないサラリーマンには違いないが、時には職場からも友からも親戚からお饗別までいただいてしまう強運青年。不思議である。そのころは余暇社会でもなかった。休日も日曜日と祝日だけだった。にもかかわらず自分の好きなことができた。私にとって、いま余暇は幻想だが、あらゆるものから「お暇ごめん」さえしてしまえば、まことの余暇が我が手の中にあるところか。こむのだ。

■1943年御坂町生まれ 日本現代詩人会会員 日本現代詩歌文学批評議員 詩集に「落日探集」ほか 童話集に「曲らしく花らしく」 エッセイ集など

人生すべて余暇？

岩崎正吾

わが辞書に余暇という言葉はない。余暇なんてクソ食らえだ。そうツッパリたいのは、正直なところ。余暇に当たる時間が自分の中に見当たらないからだ。一日の大半を、本を読むか、原稿を書くか、出版に関わる仕事をして過ごす。本はひたすら読む。メシを食いながら、トイレにいながら、風呂に入りながら読む。そうしないと、読まなければならないものが読み切れないからだ。本当は車を運転しながらも、読みたいくらいである。一日に一回は、一人でコーヒーを飲む。この時間が余暇に近いと言えようが、まとまった読書の時間が欲しいからである。たいてい、何をどこまで読むか、目標を決めて喫茶店に行くから、やはり仕事をしに行くようなものだ。因果なことだと思いが、長い小説にかかると、仕事の切れ目というものがなくなる。何をしても、小説のことが頭から離れなくなる。それこそ寝ている時も、頭の中では小説の登場人物たちが動き回っているのだ。眠りが浅くなり、体は疲れているのに頭は冴えているという状態になる。苦しくてたまらなくなり、早く寝になりたい、死にたくない一心でがむしゃらに小説の結末を目指す。もしかしたら、わたしゃマゾかしらと、小説を書くたび本気で思う。小説を書いている時は、煙草を吸ったり、鼻くそをほじったり、外をぶらぶらしたり、端から見るとのんびりしているように見えるらしい。他人からしばしばそう言われるが、当人の頭の中は人殺しの話でいっぱいなのである。だから、余暇なんて意識はまったくない。旅行も仕事からみものばかりだし、どこに行っても何を見ても小説に使うことばかり考えている。長い間、日曜も祭日も仕事をしているし、やはり余暇なんてどこを探してもないような気がする。しかし、余暇という題を与えられ、しみじみ考えたことがある。読書という行為は、たいていの人にとって余暇を使って楽しむものだろう。また、余暇を利用し、絵を描いたり、小説を書いたりする人もいるだろう。だとすると、読書と小説書きでいっぱいのわたしの時間は、ほとんど全部が余暇みたいなものかも知れない。余暇こそ、わが人生なのだろうか？

■1944年甲府市生まれ 小説家 長編歴史ミステリー「異説本能寺・信長殺すべし」が講談社文庫として再刊 新しい信玄を描いた長編歴史エッセイ「武田信玄はどこから来たかー武田騎馬隊の謎を追う」(山梨ふるさと文庫刊)が話題を呼ぶ

倍 あぐら

佐藤眞佐美

石川好さんは1947年(昭和22)の生まれだから、ちょうど団塊の世代である。かれは高卒後渡米し、兄の経営するカリフォルニアの苺畑で数年働く。その間の体験をまとめた「ストロベリー・ロード」(早川書房)で、1989年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。一流をお勧めしたい。かれがアメリカにいた同じころ、ぼくもその近くに住んでいたらしい、と本を読んで知った。クリントン大統領が不倫裁判で無罪が確定する前、ある新聞に石川氏は、アメリカのベビーブーマー(日本の団塊の世代)は、この程度の男女交際を目くじら立てるほどの事件とは思っていないと記し、無実を示唆する論評をしていた。かれが無罪になったのは例のバイアグラと無関係ではない、という奇論が今回のテーマである。地元紙の最近号に、退職期に近づいたアメリカのベビーブーマー、日本の団塊世代と彼らをとりまくマーケットの違いに触れた記事があった。それによると日本では老後の不安から年金や住宅改造が中心となり、アメリカでは年を取ってもこんな事ができる、と夢を求めることが奨励されているそうだ。で、あのバイアグラだが、つまりはあらたなる人生への挑戦ととらえて前向きだ。クリントン氏は前途に光明をともし英雄なのである。近年生涯学習という語をよく聞く。土日が休みになり時間ができた。寿命が延びて定年後の暇をもてあます。暇潰しに人生でやり残したこと、あるいは新たな目的をみつけて学ぶ姿勢を保ちつづけようと呼び掛けたり支援する組織がある。山梨県社会教育委員連絡協議会という。なぜかぼくはその会の副会長という噂のような席に座り、週日は社会教育関係者が一堂に会した研修会に出席し、これも噂のような助言者なる役を務めたのだが、閉会后入れ備と老眼鏡の落とし物を見て、どっと疲れが出た。生涯教育としてのぼくの目的はおとなの小説を書くこと。そのときのペンネームだけは決めてある。タイトルがソレである。

■1939年北海道生まれ 日本児童文学者協会 日本児童学協会会員 著書に「怪奇!大東京妖怪ゾーン」(ポプラ社)「文ちゃんのはるかな知床」(北海道新聞社)近著に「シレットクのシルバー」(草葉社)「山梨の童話」(リブリオ出版)など

日々の暮らしの宝探し

仕事、生きがい、感動 文化をひらく探検家たち

心の時間を充実させたい 新発見の「佐藤洞窟」

早野 MUHもお蔭様で20号となりました。今日は、巻頭エッセイをお書きいただいている先生方をお迎えしての、記念の座談会です。

巻頭エッセイは毎号ひとつのテーマを設け、競作いただくもので、たいへん好評です。どんな個性をおもちの方々

なのだろう、どんな生き方をされているのだろうと、読者の関心もさまざまです。

佐藤先生は、富士山の洞窟探検をされておいでですね。

佐藤 先頃も、新しい溶岩樹型が発見されましたね。溶岩樹型というのは、富士山の噴火で溶岩が樹海を流れたとき、樹木が閉じ込められ、消失し、その後でできた空洞です。

早野 ほう。富士山は今でも、もっとも身近な秘境ですね。

先生には「地底王国探検隊」という児童文学の著書もありで、以前から少年少女を引率されては自然観察や、森の楽しみ方を教えていらっしゃいます。確か、先生が発見され、先生のお名前をつけた洞窟がありますよね。そう、佐藤洞窟、でしたね。

佐藤 洞窟というのは入口の大きさよりも奥行きが深く、しかも、30メートル以上、という基準があります。わたしの発見した洞窟は360メートルほどありまして、しかもまだ先がありそうです。大学の探検隊が調査しているところですよ。

早野 地図にも載るわけですね。探検の証しですね。児童文学と探検、先生は腕時計など外してしまって、ご自分の時間を自由に生きていらっしゃるのですね。

文化の風土づくり 草は一本では育たない

早野 岩崎先生は、山梨ふるさと文庫という、地方文化を育む出版社の代表です。小説もお書きです。

岩崎 出版も不況でして。これまで右肩上がりできた売り上げが、戦後はじ



早野 潔

ゲスト

江宮 隆之氏 作家

古屋 久昭氏 詩人

岩崎 正吾氏 作家 出版社社長

佐藤真佐美氏 児童文学作家

ホスト

はやの きよし
早野 潔
早野組社長

めて、前年を下回りました。不況のときこそ本が売れる、といわれた時期もありましたが、この不況は得体が知れません。しかし、だからこそ、頑張りどころなのだ、と心に期しています。

小説は、時代小説を目指しています。しかも、山梨の郷土史に由来するものを書きたいと、構想中です。

早野 長いこと郷土にこだわって仕事をされてきましたよね。文化は一人では育たない、というのがいつも口癖でした。

岩崎 一昨年、山梨文芸協会を発足させ、事務局長を務めています。

文化は風土がなければ芽生えていきません。土がないと植物が育たないのと同じです。さらに、その植物も、一本では成長しません。群生することでそれぞれが生きる場所を得て、花を咲かせていきます。

早野 どのくらいの方が賛同し、会員になっていますか。

岩崎 およそ100人です。会報の宛て名書きも、切手貼りもいりません。

早野 小説教室も、最近はじめられたようですね。文学をしようという人たちも、この山梨にもいるのですか。

岩崎 募集に対して5人ほどの問い合わせがあればと、予測していたので

すが、思い掛けないことでした。面接の後、30人ほどで教室をスタートさせました。わたしもまた、学ぶ教室です。

身近なものの価値を 早朝スケッチで目をひらく

早野 古屋さんは、詩人で、絵もお描きになる。多才な方です。ここ数年は「癒し」ということをテーマに、活動をされていますよね。

古屋 豊かで、快適な生活を望んできたはずが、現代人は自由を失くし、心のよりどころさえ失いかけています。欲しいものが手に入っても、なおさみしい、という感情は、誰しものものではないでしょうか。わたしも、普通の生活者です。

でも、普通の生活のなかに喜びを見出し、心を癒すというのは、創造的なことになります。雲は天才である、といったのは石川啄木ですが、誰でも天才になることはできます。

疲れて、現実から離れてみたいとき、南アルプスを眺めながら、いつか写真で見、また、読んだことのあるネパールの暮らしを思い、ここはネパールなんだと錯覚してみる。

南アルプスに、ヒマラヤ山脈を重ね

てみるのです。それだけでも、心が動く、癒しになります。

早野 生活というのは、自分の計画というより、社会の約束事で動いていくというところがあります。しかし、不満を社会のせいばかりにしているのは怠慢というものです。

自分の生き方は、自分で作っていくもの。古屋さんは早起きだそうです。しかも、ご自分に課しているのがおありです。早朝スケッチは、まだお続けですか。展覧会もされましたね。

古屋 50歳になりましたときに、朝5時に起きることを決めました。そして、身の回りの、ささやかな草花や野菜をスケッチすることを思い立ちました。

わたしは勤めを持っていますから、仕事に出かける前の、自分だけのひとときです。

早野 どんなことがきっかけだったのですか。信念ですね。

古屋 いえいえ、ある日、書類をコピーする必要があって、近くのコンビニエンスストアに行ったんです。コピーをしながら何気なく眺めた本棚に「早起きの効用」という本がありました。

さて、自分にとっての早起きの効用とは何だろうかと考えました。そんなこと

がきっかけです。たいそうなことではありません。

早野 まさに、雲は天才である、ですよ。

出会いがつくる人間形成 人物評伝の読みどころ

早野 江宮さんも、古屋さんと同じように、会社では責任ある仕事を果たしながら、評価の高い文学作品を生み出しています。

江宮 よりよく生きるということは、時

間をどう充実させるかにかかっているようです。時間があるから何かできそうだが、時間がないからしたくても何もできない、というのではしかたがない。

わたしは一日を三つに分けて時間表を作っています。右手の時間、左手の時間、という分け方です。

右手の時間というのは、生活の糧を得るためのもので、会社にいる時間。

左手の時間は、創作のための時間です。残りの8時間は休息をふくめた睡眠

時間です。

今年はもう51歳になるのですが、人生において与えられている時間を思い、右手の時間も、左手の時間も大切に、意識的でありたいと思っています。

早野 お仕事は精力的で、このところ出版も相次いでいます。いずれも山梨にゆかりのある人物を取り上げ、新しい光をあてていらっしゃる。

いまは、どなたに取り組みまれておいでですか。

江宮 山梨出身の唯一の総理大臣である石橋湛山です。

明治37年の生まれで、俳人の飯田蛇笏、小説家の中村星湖といった方が同じ年です。首相になったお祝いの提灯行列があったのですが、わたしは子供のとき、これに参加した記憶があります。この方のことを書いていて感ずることは、人との出会いと、その影響ということについてです。

甲府中学に学んだときに、恩師から

「ビー・ジェントルマン」ということを教わり、これが石橋湛山の生涯を支えました。

つまり「君子たれ」という理想です。教育は大事だ、とも感じます。石橋湛山は、いわゆる成績のよい少年ではありませんでした。中学では落第して、5年間、通ったそうです。大学受験も、2回、失敗しています。

早野 わたしたちの隣人、あるいはごく普通の庶民、という風貌ですね。ところが、心に期すものがあり、しかも、独学をしたがんばり屋です。

江宮 等身大の人物をとおして、生き方を知る、人生に立ち向かう勇気を得る、といった作品を書き続けたいですね。

体験と実感を大切に 山梨は豊かな創造の土地

早野 先生方のお話をうかがっていると、心が広がっていきます。ご自分の人生をきちんと設計されておられます。さらに、あらゆるものに、興味と関心を寄せられています。いまは元気のいい時代ですから、ことさら、刺激的でもあります。

佐藤先生の「元気の素」はなんでも



よう。

佐藤 生活は不規則ですが、朝5時半に起きて、1時間ほどのウォーキングをしています。糖尿病なのですが、酒がやめられません。そこで血糖値を減らさなければならないという事情もあります。

日曜日の朝は、近くのお寺で座禅を組みます。それから弓道をします。弓道は立禅ともいいまして、心を無にして、的に向かってひたすら集中することで、平常心を養います。

常に、体験、ということを中心にしています。洞窟の暗い水のなかにひそんでいますと、ほんとうの自然の寒さということを経験できます。

この洞窟のなかでも、瞑想にふけります。これをわたしは洞窟禅といいまして、座禅、弓道の立禅とともに、仕事に行きづまったときや、構想を練るときに頼みとしています。

早野 非日常の世界ですね。そうしたことで、日常というものがかえって見えてくる。物事を客観的にとらえられる。ご自分を厳しくひとつの状況におかれるのです。先生は北海道のお生まれですが、山梨のどのようなところに関心をおもちですか。

佐藤 富士山の雄大なドラマには、いつも心をひかれます。山梨の方は、何によらず、近くのものにあまり価値をおきません。いつまでたっても東京志向で、そのくせいつも不満をもっている。つまり、ふるさとにいながら、ふるさと意識がないようです。

富士山は、自然の成り立ちや、縄文人の暮らしまでイメージさせてくれる尊い山なのですね。

山梨はまた、川を生命としてきた土地であり、川と人間の暮らし、文化や歴史に特別なものがあります。

そこにも視点が向きます。歴史を書き換えなければならないところもあるはずで、仕事の意欲をかき立てられます。

愛する山梨 歴史に学ぶ知恵

早野 文化の風土をつくるということに関して、岩崎さん、山梨のこれからをどうご覧になりますか。

岩崎 人間がいま、壊れていますね。世相も混乱し、暗い出来事ばかりです。これに対して、まじめに問いかける人たちの少ないことが残念です。

ことに、人を殺してなぜ悪い、などというテーマで若い人たちが論争し

ているのをみると、滅入ってしましますね。

何かが壊れています。見えないものを感じる力や、人を配慮する心が育っていないのです。これは本を読まなくなったことと関係があります。

本を読むことで与えられるのは、人の体験を共有できること、想像力が芽生えること、また、自分の生き方や感じ方を、言葉をとおして表現する能力が養われていきます。

言葉を理解し合ってこそ、人間社会のコミュニケーションは成り立つのです。

山梨の文化風土ということでは、自分の住む社会で、本を伸立ちとした運動を展開していきたいというのが、これまでの、そしてこれからの、わたしの変わらぬテーマです。

早野 皆さんそれぞれに、山梨を再発見され、誇りをもっていらっしゃる。何よりも愛していらっしゃる。さらに、山梨に住んでいることの責任さを感じていらっしゃる。心を打たれます。

古屋さんは、この混迷の時代を、どんな信条でお過ごしですか。

古屋 毎日歩いた跡が、一年を振り返ったときに、ひとつの道になってい



■江宮隆之氏
1948年増穂町生まれ
第13回歴史文学賞 第8回中村屋賞



■佐藤眞佐美氏
1939年北海道生まれ
北川千代賞
大学講師 日本児童文学者協会会員



■古屋久昭氏
1948年御殿町生まれ
日本現代詩人会会員
日本現代詩歌文学館評議員



■岩崎正吾氏
1944年甲府市生まれ
山梨ふるさと文庫代表
角川ミステリーコンペ・グランプリ



るような、そんな生き方を心がけています。

自分らしく、そして自分の人生がただ時間だったということでないように、と思っています。かといって、大掛かりな何かをするということではありません。小さなこと、身近なことに感動と喜びを求めたいですね。

ある詩人の言葉に「枝頭の春」という言葉があり、たいへん興味深く覚えています。

詩人が春を探しに出かけていきましたが、なかなかこれが春だというものに出会うことができませんでした。そして、家に帰って我が家の庭を眺めているときに、小枝の先につぼみを見つけました。

そのとき詩人は、ああ、ここに春があ

る、そう目がひらかれた、という詩です。

早野 趣味やスポーツでも、何をやるにもそうですが、スケジュールを組んだり準備に大わらわですが、そしてガイドブックで情報を探するなどして身構えますが、ほんとうの捜しものは身近なところに、足元にある、というわけですね。

また、時間があるから何かができるというものでもない。忙しい人のほうが、趣味をたくさんもっているし、勤勉ですね。

江宮さんの日頃から心がけているモットーというのは何でしょう。

江宮 「歴史人物のなかに友達を三人つくれ」ということです。聖徳太子でも、織田信長でもいいのです。

歴史のなかの人物というのは、自分

が事にあたって悩んだときに、語りかけ、応えてくれます。三人いると、いい知恵が出ます。歴史から受けるメッセージとでもいいでしょうか、それを毎日の生活の糧にしています。

早野 今日は巻頭エッセイを連載していただいている4人の先生方と貴重な時間を過ごさせていただきました。

どなたも、山梨を広く、深く、耕していらっしゃる。つまり、これが文化だとも実感しました。読者の方々も、先生方のお人柄にふれて、これからのエッセイもことさらに楽しめることと思います。

MUHもやっと20号。先生方のお話にもありましたように、ひとつの道になるような足跡を残していきたいと思っています。

[構成：三神 弘]

コンピューターの「2000年問題」の解決に 迫られるアジア各国

宮塚 利雄

みやづか とし お

山梨学院大学
経営情報学部助教授

西暦2000年になるとコンピューターが誤作動を起こしかねない、いわゆる「2000年問題」が世界的な関心事となっている。この「2000年問題」を解決するために、世界の金融機関が集中するニューヨークのウォール街では、毎週土曜日に証券・銀行・年金基金・投資信託などの各社から約5000人が参加し、3、4月に総額1億ドル(約120億円)をかけて大がかりな演習が行われている。演習は昨年7月に証券21社が参加して行われた演習に次ぐものであるが、今回の演習には同金融街の98%の取引を担っている、400以上の金融機関が参加しているのが特徴。アメリカ証券業界としては、「準備の実態を明確にして、アメリカの金融機関や企業に対する信頼性を高め、ウォール街の安全性を世界に実証する」のが狙いである。

一方、日本・中国・インド・東南アジア諸国などアジア18カ国も、3月2日にフィリピンのマニラで開かれた「第2回グローバル2000年サミット」で、この問題の解決のために協調行動をとることを決めた。電力・通信・金融・交通・医療などの分野で社会活動の根幹にかかわる悪影響をもたらすために、「国境を超えた協力が不可欠」との認識が一致し

たからである。「2000年問題」への準備状況や成功例、失敗例についての情報を共有化し、世界銀行やアジア開発銀行などにも協力を要請し、4月の後半から予定される「2000年問題行動週間」にも積極的に参加していく方針を打ち出した。

もっとも、世界銀行の調査によると、発展途上の139カ国・地域のうち、「政府が確固とした対応」とをとっているとされる水準に達し、かつ実際にコンピュータープログラムの改修など具体的に着手した国・地域はチュニジア・コロンビア

など21にすぎない。とくに東アジア太平洋では14カ国・地域のうち、中国やフィリピンなど6カ国が「全国規模の対応計画が存在する」と判定されたが、実際に「確固とした対応」とをとっている国はゼロであった。

日本の「2000年問題」への対応について、イギリスの有力経済紙フィナンシャル・タイムズは、「日本企業が十分な対応をしていないとの懸念から、欧米の銀行は日本の大企業との金融取引を抑

制する可能性がある」と警告している。また、2000年問題の発生は、2000年1月1日午前0時、空の交通規制します。コンピューター誤作動に備え、国際民間航空機関(ICAO)の勧告に従って、2000年1月1日午前0時から、日本を結ぶ太平洋ルートなどの対応について協議した。コンピューターの誤作動で航空管制システムが停止しても対応できるよう、2000年1月1日午前0時の前後は、飛行機の出発を遅らせるなど、飛行機を抑制する。日本路線の場合、1月1日午後0時の日本発の日本線は、1月1日の日本線に振り替えられる影響がある。

(朝日新聞1999年2月27日号)
2000年問題は世界的な規模で発生する

えることを検討している」(3月3日号)という趣旨の記事を掲載した。欧米の先進諸国から見れば、日本ですら十二分な対応策をとっていないのである。経済危機に見舞われているアジア各国は、経済問題の解決と「2000年問題」の解決を同時に求められており、苦しい立場に立たされている。

こういう時であるからこそ、アジア各国への日本からの強力でかつ至急な指導と援助が求められている。

奉仕への 「参加」と「役割」

志村 康子

しむら やすこ

フリーライター

最近、「ボランティア」を始めてみて、「ボランティアとは何か」が少しわかりかけてきたように思う。結論的にいうと、生意気かもしれないが、それは「いままで見えなかった物が見えてくる」ということである。職場で働いていたころは「無報酬の奉仕なんて、いい仕事ができるわけがない」という苦さにかこつけた思い上がりがあったし、また実際に報酬が必要な生活だった。だからといって仕事を辞めた今、「お金はいらない」というのではないが、そこには微妙な気持ちの変化が起こってきている。その変化とは「奉仕への参加」と「奉仕への役割」に「心のさわやかさ」が潜んでいることであり、疲労とも受け取られがちなボランティアに、「無報酬のルール」があるのではないかと思うようになってきた。

「奉仕への参加」は、私が住む町の自治会婦人部の「おむつたみ」から、その「ルール」が見えてきた。この自治会では、歩いて15分くらいの近くにある重度の障害者が入所している施設のおむつたみを、もう20年以上も手伝っている。月1回、最終月曜日の午前中、女性たちが10人くら

いで参加する、いわゆるボランティア活動を続けている。平日の奉仕なので職場で働いている女性の参加は望めない。私も長年参加しなかった。参加は退職してからである。そして気付いたことがある。家庭にいる専業主婦たちの「無理しない奉仕精神」に。

最初、私は自分が長年参加しなかったことも忘れて、1人が何回も奉仕するのは不公平なので、自治会の女性全員が参加できる方法を考えだせば「1年に1回の奉仕」で済むのではないかという頭だけの計算をした。この事を隣家の知人に話すと、「志村さん、そうはいかない」といって笑われてしまった。知人いわく、「日程表があっても、その日の朝になって欠席するし、人によってはすっかり忘れてしまうし…。でもね、欠席しても次の月に参加できるし、自治会の婦人部役員(当番制)になれば、やりくりをして参加しなくてはならないし…」そう。「継続は力なり」というルールがあることを知った。

「奉仕の役割」は、これも私事になって誠に申し訳ないが、昨年の6月から始めた「協力員ボランティア」の仕事で、自然とふれあう子供たちのたく

ましさに感動し、60代の女性にできるボランティアの役割みたいなものを体験した。

子供たちの夏休みを中心に、財団法人キープ協会の環境教育事業部では毎年、委託事業も含めて県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを拠点に、清里でさまざまなイベントを実施している。ここでの協力員ボランティアは「生き生きとした子供たち」と「そこに奉仕がある」という接し方で時を楽しむことができる。

ジャージー牛の乳しぼり体験や牧草地でのハイキング、それに八ヶ岳カンティフェアで行われる「ケンタッキーダービー」などは子供たちに喜ばれる行事として人気がある。牛の糞に興味を抱いて道を引き返して見に行ってくる6歳の女の子。小雨の中で両親の「帰ろう」という言葉も聞かずじっとダービーに見入る5歳の男の子。犬と一緒に草原をわが庭のごとく駆けめぐる8歳の元気な女の子。ここでは「見守る人」がボランティアの役割である。またこのように、子供たちの秘密の場所をたくさんにすることが、ボランティアの役割のような気がしてならない。



咲いた、咲いた、春。



特別養護老人ホームトリアス
施工/株式会社 早野組

気持ちのいい大気と、豊かな土壌に育まれて、今年も大輪の花を咲かせた。この地にもハートフルな「春」ひとつ出来ました。いつまでも美しい花を見せてください。



株式会社 早野組

本社 ■〒400-0807 山梨県甲府市東光寺一丁目4-10
TEL 055-235-1111 (代) FAX 055-235-1109
●リニューアル室 TEL 055-232-0200
東京支店 ■〒193-0835 東京都八王子市千代町2-5-24
TEL 0426-67-8800 FAX 0426-67-9497

中部支店 ■長野県新田市中平2821-1 TEL 0265-22-9999 FAX 52-2171
新潟営業所 ■東京都新宿区西新宿4-41-7 TEL 03-3376-2897 FAX 3375-7124
静岡営業所 ■静岡県静岡市東町5-7 TEL 054-284-9808 FAX 284-3919
岐阜営業所 ■岐阜県土岐市桑原の本町1丁目32 TEL 0572-55-2624 FAX 55-0817
神戸営業所 ■兵庫県神戸市東灘3-4-69-1 TEL 0265-83-0360 FAX 81-5468

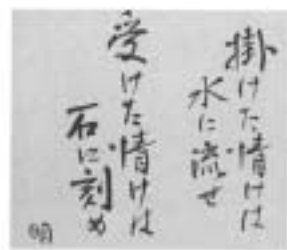
ISO9001 認証取得

企業ウォッチング

甲府紙器株式会社

代表取締役

小林 明 氏
こばやし あきら



●甲府紙器株式会社データ●

昭和31年創業。平成8年に現・小林社長が2代目として就任。段ボールケースを始め、段ボールシートや包装用資材全般を取扱う。資本金2000万円。社員数71名。主な販売先は県内外の工業、食品関係会社等。数多い。JIS日本工業規格表示許可工場。全国農業協同組合連合会指定工場でもある。〒400-0815 山梨県甲府市国玉町831 ☎055(233)7171

キラリと光る眼光。低音で凄みのある声。言葉の節々に漂う気概。そして、自らのポリシーを貫く豪快な生きざま。巷では本宮ひろ志のマンガ「サラリーマン金太郎」が人気を呼んでいるが、この方は(企業のトップをつかまえて、こんな言い方は大変おこがましいが)もしかしたら「社長版・金太郎」かもしれない、と思わずにいられなかった。

会社でも人生でも下をみてないとダメ

甲府紙器(株)の社長、小林明さん。その人生観のひとつに「掛けた情けは水に流せ。受けた情けは石に刻め」という言葉があるそうだ。「要するに義理と人情なんだ。これがなくなったらね、会社だって人間関係がうまくいかないよ」。ライン長たちにはいつも「上を向いちゃいかん」と話す。それは「社長や常務の顔色伺って仕事するんじゃないで、自分より下で働く人間のことをいつもみているべきだから。その基本を間違えないようにしないと」、人材教育を重視し、女子社員の軼も、朝の挨拶に始まり電話応対にまで徹底して行っている。「朝起きて親におはようと言いたくても言えない人がいるんだ。給料だってお客様からもらっていると思えば、自然に受け答えにも心がこもるはず」と小林社長。年末年始には、



大きなユーザーさんよりも、普段なかなか会えない小さなユーザーさんのところへ積極的に足を運び、感謝の気持ちを伝えては、自ら持論を体現している。

社員の生活は私が責任持って守りたい

コルゲートマシン(波形の中芯とライナーを張り合わせる機械)を設置して、シートからケースまで一括して製造している甲府紙器(株)。県内の青果関係だけでも40%のシェアを占め、この業界ではまさに一人勝ちといってもいいほどの業績を誇っている。

「おかげさまで財務的、人的にも非常に恵まれているので、これからもこのベースを守っていきたい」と話す小林社長は、お客様を大事にするのと同じくらい、現場で働く作業員たちを大事にしているようだ。原紙から段ボールを作る工程には高温の蒸気が必要で、夏は工場内が40℃にも上るといふ。汗で濡れた服を着替えながら、なおも仕事を続ける作業員に対して、決して気づかいを忘れない。

週に2、3回出張する傍ら、時間さえあれば現場へ出て労いの言葉をかける。そしてまた、竜王町にある児童福祉施設・明生学園へも時々慰問する。「お正月に家族で帰省したり、旅行へ出かける様子がよく放送されるけど、同じニュースでも傷みをとまなびで見ている人がいっぱいいるんだよ」そんな風に様々な立場の人々に関心を向け、気持ちを汲み取ることができるのは、恐らく、社長自身が幾度となく正念場をくぐり抜けてきたからではなかろうか。

奥様や娘さんの話題に触れると、とたんに笑顔をほころばせた小林社長。そこには、多くの人間から一手に信頼を引き受けて生きる、希少なほどの男気を感じた。

ママネットやまなし

“子育てママ”を応援する
心強いネットワーク



お母さんといっしょにボール投げ

お母さんに育児を 楽しんでもらいたい

「ママネットやまなし」は、山梨県の育児サークルネットワーク。代表の宮沢由佳さんは、保母の経験を持ちながら自らも子育ての難しさに直面し、8年前から同じ悩みを話し合える子育てサークル「ちびっこはうす」を始めた。そこから少しずつ幼児を持つ母親たちの輪が広がり、各地に生まれたサークルとも効率的に交流が活かせるようにと、1996年にネットを統括する事務局

が発足。現在26サークルが加入、約500組の親子が参加している。これまでに遊びの講習会や親子参加のイベント、パンフレットの配布やサークル運営のアドバイスなど幅広い支援に取り組んできた。「一人でも多くのお母さんたちに、ひとりぼっちじゃないよ、泣かないで、と呼びかけたいんです。子育ては共感できる仲間がいると心強いし、不安や悩みも解決できるから」と宮沢さん。メンバーたちも「とにかく母親に子育てを楽しんでもらい、周辺にいる人々も巻き込んで支援の輪を強めて

いけたら」と願っている。

育児を母親だけに 押し付けない社会に

「ひと昔前では当たり前と思われていた子育てが、時代の変化とともに当たり前でなくなってきました。男性と同じように社会の第一線で活躍していた女性たちに、出産したからといって急に、お前は母親なのだから育てられるはずだ、というのは間違い」と宮沢さん。

また「子育てサークルという、母親たちが遊ぶための場と誤解されることもあり、社会の目は必ずしも好意的ではない」ともいう。日本の将来のためにも一日も早く、女性が子供を産みたくない社会、子育て中の母親を温かくフォローしてくれる社会に変わってほしいと思う。

◆ママネットやまなし◆

1996年発足。現在26サークル、約500組の母子が参加。キャラバンや学習会、フリーマーケット、コンサートなど様々なイベントを常時開催。オリジナルパンフレット「ママ!ひとりぼっちじゃないんだよ!」も大好評。

代表 宮沢 由佳

連絡先 〒400-0058 甲府市宮原町151-5
ちびっこはうす内 ☎055 (241) 7521



『都市の魅力』

青木茂樹

山梨学院大学経済学部専任講師

●都市の光と闇

「生産と消費」「秩序と無秩序」「生と死」「生と動」「ケとハレ」「日常と非日常」「光と闇」…。いろいろな対比を試みたが、都市の重要な役割は実は後者にある。都市は国家を支える中心であると同時に、それを打ち壊すような反秩序の要素を備えている。都市について議論するときに忘れてはならないのが、都市の持つこの二面性であろう。

これは人間自身が持つ二面性でもあるのだ。我々人間は日常的に生産行為を行い、秩序のなかに身体を委ねながらも、反面、そこから逃れ、その秩序を壊したいという欲望を秘めている。

例えば、古今東西どこをみても祭りは存在し、大阪・岸和田のだんじり祭りや長野・諏訪の御柱祭に見られるように、時には命を賭すような、外部の人間からは理解できない行為が行われている。その時だけは、人々は日頃の秩序から解放され、無礼講が許される。こうした解放の時は年に1、2回だけしかないと重要で、これが四六時中あっては解

放された時の喜びが弱まる。日頃は秩序正しい生産の日々を過ごすのである。このようなハレ（非日常）とケ（日常）は、人間のもつ根本的な原理なのである。

ハレの機会として時間軸上に置かれるのが「祭り」ならば、地理的空間上に置かれるのが「都市」である。ムラが同一文化で秩序だった空間ならば、都市は異文化、異民族が流入し、常にカオスな状態にある空間だ。だからいろいろな情報が流入し、様々な創造が行われる。そこは日常的な祭りが繰り広げられている場となるのだ。都市とムラの祭りを比較するとおもしろい。

例えば、ムラの結婚式はここぞとばかりに賑やかに行われるのに対し、都市の結婚式は乱れることもなく粛々と進行される。これは、ムラという秩序の場と都市という無秩序の場の違いによって、祭りの意味合いが異なる例であろう。

徳川は江戸に幕府を開くにあたって、この原理をうまく生かし都市計画を行った。江戸城の周りには武家屋敷を配置し「ケの空間」を造った。

川向こうの日本橋界隈に商店や遊郭を配置し「ハレの空間」とした。都市が拡張してくると、ハレの場としての遊郭を浅草田町に移した。明治以降の多くの文豪は、旧幕臣で江戸城界隈を追われ、浅草の隣の向島に移り住んで、明治以降様々な作品を残したことから、文化発信の場として、ハレの空間が果たす役割が分かるであろう。

●都市は何処へ

先にあげた江戸の都市政策は、ハレの場とケの場を明確に分けたというのが、人間の本質をよく理解した上での政策だったと言える。それに対して、近年の都市計画には、ケの論理のみで語られているような気がしてならない。

中心市街地活性化といっても、きれいなストリートを造ったり、駐車場を整備したりといった発想だけでは、魅力ある街づくりとはならないであろう。特に近年の郊外型の店舗に対応するためには、そこにはない、ハレの空間としての都市の発想を視座にいれながら、街づくりを考えていく必要があるだろう。

早野グループ4社から 一番ホットな情報をお届けします



レインボースタンプクリート

当社と日本道路株式会社とで技術提携している、「レインボースタンプクリート」を三和リース様の御坂ヤードにて施工いたしました。「レインボースタンプクリート」の概要・特徴は以下の通りです。

概要 コンクリートやモルタルが柔らかいうちに、専用カラー材で着色し、その上から特殊なデザイン型枠を路面に直接押し型するスタンプコンクリート舗装

特徴 ・自然石、レンガ、自然木などの素材感をそのまま再現

・多彩なデザインパターンと豊富なカラーバリエーションの組合せが自在

・素朴感、高級感、準日本風、ヨーロッパ風などあらゆる表情の演出が可能

用途 遊歩道、駐車場、公園、建物中庭・エントランス、その他



三和リース様

施工例

あなたのビスタ車をドレスアップするカスタムシリーズ

愛車を大事に、きれいに乗りたいと思う気持ちはだれでも一緒です。

今回はさらにドレスアップして、個性豊かなカーライフを楽しみたい人のために、ビスタからご提案します。

「カスタムシリーズ」には、全身エアロでドレスアップしたビスタ&アルデオ。迫力のローダウン仕様のハリアー、イエローカラーでアメリカンテイストなイブサムなど個性をひときわ生かします。

お近くのビスタ店でご覧になって下さい。



ドレスアップの一例

①
メッキヘッドランプドア
専用エンブレム付ビレットグリル

②
VISTA

③
VISTA

④
ビレットグリル付フロントバンパーボイラー&
ビルトインフォグランプ
(CIBER社製・100Φ・ゴールド/シルバー)

⑤
リアバンパーボイラー&
スモークリヤコンビネーションランプガーニッシュ

⑥
サイドマッドガード

トヨタビスタ山梨(株)
本社：甲府市朝風3丁目10-21 TEL055-232-5511

新世代24X新登場

常にさまざまなことに興味を持ち、やりたいことがたくさんある。子どもや親のこと、先々のことも充分考えて、暮らしをしっかりと楽しみたい。これからの家族のそんな思いに応える家が、トヨタホームの「新世代24X」です。

新世代24Xの「新3階夢空間」は、通常の2階建にさらなるゆとりを加え、いつまでも自由な楽しみ方を創っていきける生活価値倍増の夢空間です。

その他にも、家族一人一人のことを考えたさまざまな新提案が盛り込まれています。

①暮らしの変化に対応するバリアブルな「大空間」。

②数十年に渡り安心を支える「強い構造」。

③快適さと便利さを生む「賢い技術」。

すべてがトヨタホームの技術だからこそできた、高度な提案です。



夢空間

プライベート

パブリック

家族とともに育つ家、「新世代24X」で、あなたの家族にふさわしい家づくりを始めて下さい。トヨタホーム山梨(株)のスタッフ一同、家づくりの応援をさせていただきます。何でもお気軽にご相談下さい。

トヨタホーム山梨(株)
本社：中巨摩郡昭和町西1043 TEL055-275-1234 FAX055-275-7806

クリーンな環境を目指して

廃棄物は人間の活動に伴って発生するもので、ゴミなどの汚物や自分で利用したり他人に売却したりできないために不要になったすべての液体または固形状のものです。またその発生形態や性状の違いから「産業廃棄物」と「一般廃棄物」の2つに分別されています。

産業廃棄物は事業活動に伴って生じた廃棄物であり、燃え殻、汚泥など19種類のものを言い、今や工場、事業所、商店などあらゆる所から排出されています。産業活動の発展に伴い排出量は増加する一方、質も多様化し、全国の産業廃棄物の最終処分場の残容量も多くない状況において、自然と調和のとれた産業廃棄物の適正処理の重要性は周知の通りです。

当社では運送業の公共性の観点から平成8年12月に建設廃材の「産業廃棄物収集運搬業」を申請し、9年2月に許可されました。さらに廃棄物の多様化及び事業拡張計画に基づき、19種類のうち、廃プラスチック類、紙くず、木くず、繊維くず、金属くず、ガラスくず及び陶磁器くず、建設廃材の7種類の運搬を平成10年12月に許可されました。建設会社である(株)早野組と中間処理業の(株)ソリタとの契約、(株)ソリタと運搬業者である当社とが契約を結び、産業廃棄物の適正処理を行い、クリーンな環境を目指しています。

また我々が日常生活に伴って排出しているゴミやし尿などの一般廃棄物の処分は市町村単位で行われていますが、「可燃ゴミ」「不燃ゴミ」「資源ゴミ」等の区分を一人一人が十分認識して環境汚染を防ぐことも、将来に向けての指針と言えます。

甲府通運(株)
本社：中巨摩郡田代町流通団地3329-1 TEL055-273-0611

昭和10年代「小島の春」を
記録文学として世に問い
颯爽と登場した人

小川正子

(おがわ まさこ)

太平洋戦争に突入する前のいわゆる軍国主義謳歌の時代、昭和初年に春日居町桑戸出身の小川正子が、名作「小島の春」をもって一躍文壇にみとめられ、一時代を画したことは印象深いものがある。

私はその昔、その墓のある桑戸の仏念寺に住んでいた藤谷みさお女史や、小川正子研究を多数手がけていた小守病院の小守豊甫先生と親しくしていたから、その墓に一緒にお詣りしたり、生家に立寄って「小島の春」をめぐる、三人で楽しく語り合ったことがある。ついでに藤谷氏を通して貴重な小川正子の日記のコピーを手に入れたこともあった。

小川正子は明治35年(1902)3月26日、東山梨郡春日居町の桑戸360番地に、当時製糸業を営んでいた小川清貴の三女として生まれた。春日居小学校を大正3年(1914)に卒業、甲府高女(現甲府西高)に進んだが、大正7年同校を卒業すると同時に、勝沼町勝沼出身東大卒の樋貝詮三(明治23年4月生、一昭和28年1月没)と結婚、不幸にして3年間でこの結婚は破綻し、小川姓にもどった。その後勉学の道をえらんで、大正13年春、東京女子医学専門学校に入学、昭和4年に同校を卒業して、さら

に東京伝染病研究所で2年間研修して、昭和6年(1931)に瀬戸内海の長島愛生園に着任、救済活動に一生を捧げたのである。

現在では薬の投与で完全に治癒する癩病(ハンセン氏病)も、小川正子が瀬戸内海の長島愛生園で救済活動に打ち込んでいた昭和初期には、治療の術



若き日の小川正子

がほとんどない業病、不治の病として恐怖にさらされていた。しかもこの業病、家筋に取り付いていると考え、患者を家の奥に閉じ込めてかくしておく風習も根強かった。だからそうした患者を、ハンセン氏病はそんな業病ではなく伝染病であることを訴えて、施設に収容する

ことは大変な労苦がともなっていた。

小川正子はまさに聖医として、因襲の中におかれている患者を救おうとしてひたむきに努力したのである。そして愛生園での七年間の癩患者への熱い思いと、人間愛を「小島の春」という記録文学に託して描き、発表したものであった。昭和13年10月のことである。この物語はリアルな筆致と、短歌で引きしめた文体がはなはだ魅力的であって、読む人々を感動させ、たちまちベストセラーとなって、さらに昭和15年この物語が映画化されるにおよんで、小川正子の名は不朽なものとなった。

そして時あたかも日本国は、戦争へ戦争へとすべてのものがかき立てられていた時代であったので、純粋な人間愛と医学上の問題をテーマにしたこの記録文学は、一時代を画したものである。しかし小川正子は「小島の春」を執筆後、結核におかれ、長島愛生園を去って郷里山梨にもどり、病いを養う身となった。そして太平洋戦争たけなわの昭和18年(1943)4月29日、ついに他界してしまった。

春日居町桑戸の仏念寺に、正子の墓と歌碑が建っている。墓碑は箱形の黒

上野 晴朗

うえの はるお

1923年山梨市生まれ 歴史家・作家 県立図書館郷土資料室を経て67年から文筆活動に入る 著書に「甲斐武田氏」等多数



大正13年春、東京女子医学専門学校に合格入学の記念に家族と



長島愛生園時代の颯爽たる姿



故郷での闘病生活のころ



仏念寺にある小川正子の墓

ずんだ御影石で、正面に「小川正子墓」とあり、背面には「生きて行く日に愛と正義の十字路に立たば必ず愛の道に就け、昭和十八年四月二十九日 昇天」と刻まれている。行年41歳であった。

傍らに建つ歌碑は自然石で、土井晩翠の選、菊地猶喜の書で次の歌が刻まれている。

夕富士の山いただきも紅の
雲ふきたてて風立つらしも

歌碑の裏面には「昭和十九年七月十三日小川正子女史小学校時代師及同級生建之」と記録されている。桑戸の生家はこの仏念寺のすぐ近くである。

こうして小川正子の生涯をたどってみると、私は明治文壇の発展期に、やはり颯爽と文壇に登場した樋口一葉女史に一脈似通ったものがあることを感じる。というよりも、その星のめぐり合わせが、女性史といつか、あまりにその歩みに符合したものが多いのに驚かされるのである。

たとえばこの二人の女性の日記をみると、その赤裸な著述のなかに、自らを勝気、意地張りと呼び、どうにかひと道抜けたいという願望と闘志をもっていた。そして異性問題では一葉女史は山

梨県知事となった阪本三郎(旧姓瀧谷)に、正子女史は樋貝詮三に、それぞれ当時ときめく権勢ある政治家の伴侶として宿命づけられようとしていたのであった。しかし二人とも断ちがたい深い溝と、心の傷をうけて結婚は破綻になってしまう。

さらに宿命が似ているのは、一葉女史はその家系にライ患者が出たと思うことで、文学への方向が決定づけられ、正子女史はライの救世主としてやがてそれが記録文学に結びついている。そしてその終末はともに宿命の国民病といわれた肺結核におかされて、非常に寂しい闘病生活のなかに散っていくのである。

私は樋貝詮三氏の生まれた勝沼町とも深い関係をもったので、樋貝家の旧観も知っている。甲州街道に面して、門を入ると玄関前の右手に年古りた梨の古木があった。年々盛んに花が咲き実を付けていたから、おそらく正子女史が嫁いだころもまったく同じ光景だったろうと思う。私が県立図書館の郷土室に勤務していたころ、たまたま樋貝詮三氏の大礼服の寄贈を受けたことがあった。そのいかめしい飾りが一杯の服を見ると、そこからは日本特有の権威主義が包ってくる思いがした。おそらく正子

女史の心を追うと、そこが一番嫌だったのではないかとも思う。桑戸と勝沼はそう遠い距離ではない。権威にだけ固執しおぼれてしまう政治家から逃げ出して、愛生園での新生活に人生を賭けた気持ちが痛いほどに伝わってくる。

しかしさらに故郷桑戸での孤独な闘病生活を思うと、胸に熱いものが込み上がるのを感じる。日記は公にするのをひかえるが、非常に寂しい闘病生活の日記の中から桑戸での生活の歌だけを、幾つか拾い出してみよう。

ゆくりなく顔にみたる今朝の顔
膚せのしるきに声あげておどろく

膚せにきとほほにあてたる掌にふれて
しろきもかなし顔骨のとがれる

頬のやせわれとかなしむ一日なり
ねむごろに紅つけむをおもふ

このようなひたむきな感情の懺悔が、小島の春の栄光のかげにかくされて、いままではうっておかれたのは寂しい。日記をたどると小康の小春日和の一日、街までひそかに原稿用紙を買いに出かけている。しかし戦雲はあわただしく、何時の日かなにかが書けるであろうかと自問しつつ野の道をいくその姿は寂しく象徴的であった。

ボクのアート品観察日記13

「江戸の風情、江戸の名月」

山本 育夫

やまと いくお
ミュージアム・マガジンDOME（ドーム）／美術品観察A
（エイ・ダブリュ）／美術批評・展覧会批評誌LR（エル・アル）編集長 週刊朝日に展覧会批評連載中

この景にしか 描かれていないもの

まずは、江戸の名所、猿蓑町の夜景をじっくりとご覧いただきたい。猿蓑町は芝居小屋ばかりが集まってできた特別な町。その町並みを行く人々の姿。秋の空高くには、この町と人々を照らし出す満月が、りんとした姿を現している。

さて、この光景、何の不思議もない光景のように見えるが、実は、この「広重名所江戸百景」中、この景一枚にしか描かれていない「あるもの」が描かれている。さて何だろうか？ 答えは、「影」。(図版1)

なあんた、と思われた方もいることだろう。「影」が描かれているほうが普通、という感覚は、浮世絵の世界ではかなり特別なことだった。確かに影が描かれている浮世絵もあるにはあるが、その数は圧倒的に少ないのである。広重の描いた江戸名所百景中にも、この景だけにしか存在しない。だから、他の景をみてきた目が、この景にたどり着くと、おや？ というささか奇妙な印象にとらわれるのだ。それから、その理由が影にあることに気づくというわけだ。印象派の作家たちが驚嘆したもの、影のないシンプルで明解な世界にだ。陰影の縛りから自由に

なれなかった彼らが、平明で鮮やかな色面に出会ったときの解放感は、想像できる気がする。

満月と白い犬

であるから逆に、この景に描かれた影は、一種不思議な雰囲気を感じ出しているように思えてしまう。たくさんの人々がいるにもかかわらず、びたりと静止してしまっただけのような静けさが、満ちているのだ。芝居興業は昼に行われるのが常であり、夜には営業は終わってしまう。よくよく見ると、芝居小屋の派手な案内掲示や旗、看板類が、一つもないのもそのことを表しているのかもしれない。

夜の仕事をやる人の姿も描かれている。手前左手の黒ずくめの「占い師」(図版2)。その右手には、杖を頼りの「按摩」の姿(図版3)。

白い母犬と子犬三匹の姿も描かれている。特に、白い母犬の姿は、満月の白さと呼応しあって、この景を緊張感のある姿にまとめあげている(図版4)。

江戸の闇

猿蓑町という名前は、江戸歌舞伎の祖

と言われた初代中村座の座長猿蓑勘三郎にちなんで名付けられたという。町の長さは約三百メートルで、その両側を芝居小屋と芝居茶屋で埋めた。欄も廊もなかったが、ちょうど画面の「消失点」辺りに見えるのは、木戸。その木戸から順に、中村座、市村座、森田座と並んでいた。右側の家には「森田座」という看板が見える(図版5)。その二階の窓辺には、母子の姿も見える(図版6)。

こんな江戸の風情の中に入り込めたいだろう。この通りの「欠き割り」の外には、さらに深い闇と静けさが潜んでいるにちがいない。その感じが、いかにも江戸の風情なのだ。帰路につく人々が住む町はどういう景色なのか、知りたくなる。

反転した世界

実はこの景色が描かれた一年前、江戸には安政(1854)の大地震が起こっている。またもう少し前、天保(1841)には大火事があり、当時、天保の改革を断行中だった水野忠邦は、芝居小屋の再建を許可しなかった。こうしたいくたびの「事件」があったにもかかわらず、芝居小屋や芝居茶屋はその都度見事に復活して人々に



図版1 影の図



図版2 占い師の図



図版3 あんまの図

歌川(安藤)広重
名所江戸百景90
「猿蓑町よるの景」



図版4 母子の犬の図



図版5
芝居小屋森田屋の図



図版6
母子の図



図版8 月にむら雲の図



図版7
芝居茶屋の図

楽しさを提供しつづけた(図版7)。

目を凝らしてみると、満月には薄く「むら雲」がかかっている。微妙な色調だ。また、空の青には、ばれん(版画製作で、着色した版木にあてた紙の上をこする道具)で刷った跡が見える(図版8)。

影のある世界と、影のない世界。浮世絵の世界では、影のある世界のほうがいささか奇妙で、影のない世界のほうが自然なのだ。この、反転した考え方が、浮世絵の世界の美しさを保証してきたのだとも思えた。

さて、今回は、あのゴッホが模写した「江戸梅屋舗(第30景)」等のエピソードをご披露したい。

たまには

♪空を越えて、ラララ…♪

楽しく行こうよ 海外へ



今、安くて近くて短い期間で行ってこれる「安近短」の旅が人気を集めている。不景気がなかなか回復しなくて、なにかと短い話題の多い産業界だが、そんな中、旅行業界は“こんな時代だから”とこぞって「安近短」の旅をアピール。TVではタレントを使ったりレポート番組が放映されたり、雑誌でも様々な楽しみ方を掲載した特集ページが組まれたりしている。前回ここでご紹介した「アジアブーム」も、じつはこうした旅行業界の動きが火付け役となっているようだ。

彼とのお泊まりデートに、子連れや母娘の親子水入らず旅行に、仲間うちの飲み会にと、おすすめプランも面白い「安近短」。具体的にはどこが魅力なのかを、探してみたい。

国内温泉のノリで海外へ

まず、引かれるのは「安さ」。情報誌には2万円代の激安ツアーから3~5万円以内の格安ツアーがずらりと並ぶ。場合によっては、国内の温泉へ行くよりもよっぽど安上がりなのだ。次に「近さ」。場所としては主に韓国・ソウル、中国・上海、台湾・台北などが挙げられるが、それらはたいいてい成田から2時間半~3時間半ほどのフライトでアッという間に到着してしまう。(中国は別として) ビザはいらないし、時差ボケもほとんど心配ない。ヨーロッパやアメリカへ行くには

「よし、行くぞ!!」と気合いが必要だけどアジアのこの辺りなら「あ、決めた!」ですぐ出かけられる。そして最後のポイント「短さ」。これは、週末を利用して気軽に行ける、という意味だ。あがすリエステや足つぽマッサージ、指圧シャンプーといったリラックス系に飲茶や海鮮、焼肉を味わうグルメ、掘り出し物に出会う市場めぐり、占いに夜景ウォッチングなどなど、盛りだくさんの内容を短期間で集中的に楽しめちゃうよ、というわけ。だけどこの「安近短」、よくよく考えてみれば、同じ人種だから親しみやすいところや漢字なども何となく意味が通じってしまうところ。また海外の国の中では比較的治安がいい点など、そこには、ただお手軽なだけでなく、安心感の「安」も含まれている気がするね。



人生、楽しまなくっちゃ!!

ところで、なぜ人は旅に出たくなるのかな。日常からの脱却? 逃避したい、という心理? 刺激を受け、見聞が広がる

ということもあるけれど、旅ってやっぱり、リフレッシュできるのが一番じゃないのかな。どうせ行くなら、海外。なぜなら、いつも地上に這いつくばって生活している自分たちを違う視点で客観的に捉えることができるから。翼のない人間にとって、空を飛び、はるか海を越えていくことには、言い様のない快感があるように思う。

ひと昔前は、日本人は勤勉だ、と言われてきた。「企業戦士」とか「働きバチ」なんてこともよく聞いた。確かに、コツコツ努力するのは素晴らしいし、働くことはとてもいいことだ。でも、もっともって遊び心を大事にしてみたいんじゃないかなと思う。「人生、楽しまなくっちゃ」というセリフは何も利己的な若者だけのものではない。要はメリハリの効いた、ゆとりのある暮らし方が大切と思うんだ。普段とちょっと変わった場所、ちょっと変わったことをしてみれば、新たなバフーが湧くかもしれないし、思わぬひらめきだって湧かんでくるかもしれない。

いやあ、それは充分わかってるんだ。本当は優雅にパカンスを過ごしたいところなんだけどね。なかなかオフがとれなくて、という健気な人には、とびきり簡単なおすすめの旅がありますよ。私も大好きな東の國のフライト、さあ、何もかも忘れて「眠りの世界」へ。

Have a nice time!!

(どなた様も、楽しい時を)

こんなところに山梨 思いがけない場面で ふるさと再発見

蕎麦が人気で、自称・蕎麦通も増加中である。あそこの蕎麦はこしがある、どこそこの蕎麦は香りがいいと、蕎麦談議も盛んで、馴染みの店、晶屋の店もそれぞれあるようだ。蕎麦好きがこうじて、自分でも打って食べようと、蕎麦道場も盛況のようである。

蕎麦はもとより、天麩羅、鰻と並んで日本の伝統食である。すでに江戸の中頃には何処の町内にも蕎麦屋はあり、江戸好みの人気の食べ物となっていた。そもそのはじまりは、「蕎麦切り」と呼ばれていた。それまでの蕎麦掻きや蕎麦団子と区別しての名前で、「切る」という新しい蕎麦の食べ方だったわけだ。やがて、蕎麦といえば蕎麦切りをさすほどに支持を得、大衆化していった。

そして、江戸で評判をとるにいたった

「蕎麦切り」の発祥地が、わがふるさととは天目山の麓、大和村である。江戸時代の元禄年間に尾張藩士の天野信景の著した随想集「塩尻」には「蕎麦切は甲州よりはじまる。初め天目山へ参詣多かりし時、所民参詣の諸人に食を売るに、

ふるさとの味自慢

江戸で評判の蕎麦切りは 天目山と武田家終焉の地 大和村からはじまった

米麦の少かりし故、そばをねりてだごとせし、その後うどむを学んで今のそば切りとはなりしと信濃人のかたりし」と記されていて、大和村の栖雲寺を訪れる参詣人にもてなしたことがはじまりと想像できる。

蕎麦はタデ科の一年草で、霜に弱いほかはきわめて野性的な植物であり、日本では奈良時代から栽培されていた

という。種を蒔いてから刈り取りまでが80日と短く、他の作物の不作のときでも収穫でき、庶民の暮らしを支える食糧でもあった。栽培には、寒暖の差があり、朝夕が涼しく、日中が暖かな環境が適しているともされるが、それはまさに、日川溪谷沿いの気候風土を指すものである。

確かに蕎麦は、「蕎麦切り」にした方が香りもよく、何よりも食べやすく、上品であり、参詣の旅人には評判になったはずである。それにしても、うどんのように「のばして、切って」とはいうものの、水に溶けやすい蕎麦を新しい味覚として誕生させるまでには、土地の人びとの並々ならぬ努力があったとうかがえる。

江戸の人びとは、この「蕎麦切り」を「江戸汁」というもので喰った。これは醤油1合、ミリン1合を1合に煎じ詰めたもので、たいへん辛いものだったという。この汁にちょっと蕎麦をつけただけで喰うのがよしとされていたともいう。(石)

参考資料：天野信景「随想集・塩尻」

Book

江戸で遊ぼう 花見に行こう 「江戸の春秋」

三田村虎魚 著



著者：三田村虎魚
編集：朝倉治彦

明るいことのない時代、何処へも行きやうがないから、それならいっそ、江戸に出かけて、江戸で遊ぼう。江戸に、お友達をつくらう。

江戸のお花見は、団体で出かけて、底抜けに賑やかだった。ただ花の下で酒を飲むだけではあきたらず、唄う、踊るはもとより、素人芝居や茶番が盛んに行われた。したがって、繰り出す前から趣向を練り、それぞれ仮装にこったりと、花の咲く前の準備からもうお祭り気分だった。幕府もまた、庶民が江戸の春を楽しむのをよしとして、將軍吉宗などは花見の名所に席を設け、酒や肴を仕度し、誰彼なしにふるまったという。庶民はこのときばかりは恐れもなく、

葵の御紋の器で存分にご馳走を味わった。警備態勢もゆるめられ、酔っ払いの喧嘩なども捨て置かれたという。

こうなると、ますます花見は心のままに浮かれ、騒がしくなっていく。どうも、江戸の花見は、静かに桜を鑑賞するというのではなく、見ることも自分たちが主役となって見せる花見だったようだ。生まれて人は、桜に巡り合える数というのはどのくらいだろうか。風雨や人事にきまたげられ、満開の桜を仰げるのはまことに目出度いといわなければならない。

幕府もまた、そのことを知っての配慮だった。(川)

中央公論 ¥625

滝を見るハイキング

vol.9 深沢川 平成峡の滝

写真と文 上野 巖



木茂れ日を受けて流れる白龍の滝



平成峡周辺図



白龍の滝とは全然違った感じの千代の滝



みはらし平にあるモニュメント

櫛形町の平岡から上宮地を流れる深沢川の最上流部、櫛形山の山中にあるのが、その名の通り新しいハイキングコースとして開発された平成峡である。

スケールは大きくないが、白龍の滝を始め幾つかの滝が比較的短い時間の間に楽しめるし、森林浴コースとしても最適だ。

車の場合、国道52号「伊奈ヶ湖入口」から西に向かい、上市之瀬で右折して平岡から深沢川に沿って登る。高尾の穂見神社入口を見送ってなおぐんぐん登り、鋭角に左に折れて櫛形山林道に出る。林道走行わずかで、橋の手前左側に駐車場があって平成峡入口である。登り口は二つあるが、橋の傍らガイドマップの所

からがいい。

コースには擬木の階段が備えられているので歩きやすい。周囲はまずミズナラを主体とした雑木林だ。樹木に名札がついていて勉強になる。何本にも分かれて落ちる「八千代の滝」はすぐだ。そして5分ほどで「千代の滝」に着く。この滝はまとまって落ちていて見応えがある。

やや傾斜がきつくなっていったん南へ回り込み、ヒノキ林の中を歩いて戻ると、岩盤の上を広がって落ちるのが「白龍の滝」である。水量が多い時期なら見事なものだ。右手をやや高巻いて、いよいよ最後の「水神の滝」に着く。さすがに源流の趣きがあり、水量も少ない。

帰路はもう一度滝を眺めながら往路を戻ってもいいのだが、指導標に従って水神の滝からもみじ平経由で櫛形山の北尾根登山道に出て、甲府盆地がすっきり見えるみはらし平に下ろう。駐車場まで林道を歩いて戻る。

参考タイム	国道52号	→	駐車場	→	白龍の滝	→	水神の滝	→	みはらし平	→	駐車場
			車25分		40分		70分		40分		15分

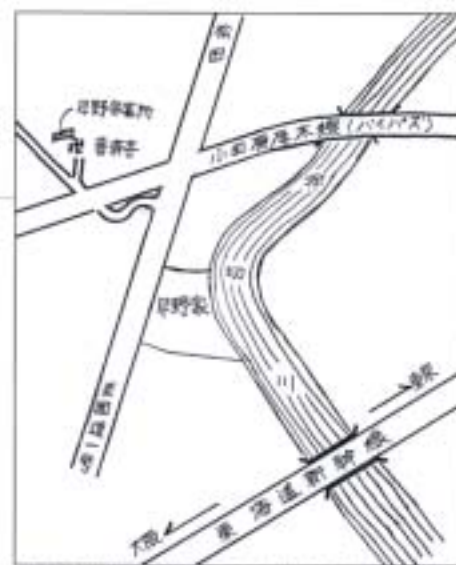
甲府通運前史を訪ねる（13）

（甲府通運のページ）

早野宗家系譜碑を建立し 祖先の遺徳をしのび発栄の源とする

林 陽一郎

はやし よういちろう
山梨県教育委員会・歴史編集文化財担当



早野家は押切川を東に、西に県道が通る。墓所はその西北にある。

堅い文章が続くが、前号に引き続いて「早野宗家系譜碑」について述べてみる。この碑が建てられたのが昭和11年（1936）であることは前述のとおりで、この碑を早野家の墓所に建立したとき、先代の早野欽介は「建碑式式辞」を述べたが、現在早野家にその式辞の草稿が保管されているのでこれにより碑を建てる経過を知ることができる。

「秋清気爽の期節に於て今日茲に当早野宗家系譜の建碑式を挙るに当り閣下並びに紳士淑女各位の御来駕を辱ふしたるは小生等一門の深く光栄とする所にして感謝の至りに堪えず、抑々此の家系譜に就いては中古以来甚だ忌はしき伝説ありて動もすれば之が謾を為したる事実遭遇し困憊の末或る時代には同族に預けたるに偶然か如上の事象を再現せる。以つて返し戻されたるに依り窮極の餘り之を厳封して家敷神たる当家鎮守の稲荷大明神に奉獻し後世子孫をして開くことなからしめたり。

然して先代金蔵も此の伝説を眞なりとし、稲荷社の祭典は厳重に施行せしも系譜に関しては厳に戒心を加え来れり。開封を首唱せる広本賢方丈及び

母の切なる忠告にも一切耳を貸さざりき、然るに先代没後、親族会議の際、之を開封する可否を計りしに異議続出、容易に決まるべくもあらざりしが、広済寺広本方丈の適切な進言により一同賛意を表し遂に開封する事に決す。厳修し鞠廟如として之を齊戒沐浴して披見すれば肥前の豪族松浦家の同族に於て北條・足利・後北條の三世期に亘り活躍せるを知るを得、崇高敬虔の念湧然として起り感奮の情転に禁ずる能はざるなり。然して是に於て皆相諮りて曰く須らく碑を建てて其の遺蹟を列記せば聊か以て祖先の霊を慰藉し湮滅せる遺徳を追慕するのみならず又以て同族一門の発奮の資ともなるべしと依りて先代のころも畏敬する諸先輩に計りて結果、小泉閣下の篆額揮毫の光栄に浴し、平川先生撰文、広本老師の揮毫を辱うす。同族一門は更なり、本村有志又労を厭はず

碑前に至る道を開き建碑の工を助くるの美挙に接し洵に感泣の至りに耐えず思うに敬神宗祖は我が国固有の道徳にして国威之に依りて輝き家運之に依りて興る 生等一門の今日あるは先代の努力に依ると雖も祖宗の遺烈に依らずんばあらず。只偏に年少なき

羸弱愚鈍に鞭うち操守り固く業務に精勵し以て祖宗の霊に報ひ奉らんことを期す。冀くは先代と同じく高教と指導を賜るを得ば幸ひ之に如ず聊か蕪辞を列ねて式辞とす

昭和十一年十一月十五日
早野 欽介

漢文調の重厚な式辞で、これによると早野家に伝わる家系譜は他見禁止で見ると災難があるといわれて早野本家の屋敷神の祠の中に厳重保管されて来たが、先代金蔵の努力によって早野家の隆盛をとりもどしたのを期に、この家系譜を世に出し、祖先の遺徳をしのび、一門の奮起の資とするために碑を建立し、永く祖先に感謝をしようとの意気込みを知る。

お客様への 心づかいから生まれる 安心の送迎サービス

ふじ寿司



県立日川高校前にある「ふじ寿司」。取材に伺ったのはまだ肌寒い3月初旬だが、軒先の白梅が昼下がりの日射しを浴びてつぼみをほころばせていた。店内に入ってすぐ向かいと右奥には、いかにも和風を感じさせる蹲踞（石の手水鉢）がしつらえてある。足元のたたきには打ち水がまかれ、何とも清々しい。

湖京着の似合うご主人の藤巻さんとしきは、今年52歳。トヨタビスタ山梨店の内田課長とは1日違いの誕生日で、20年来のおつきあいという。「昨年、大雪が降

りましたが、その時をきっかけにやはり四駆が必要と思いましてね、レジアスを購入したんです」と藤巻さん。甲府や大和、三富など遠方から来られるお客様の送迎には、この8人乗りのレジアスが活躍している。クレストも1台ある。

「ビスタさんは、車ももちろんいいけれど、サービスがいいんですよ。何かあればすぐ内田さんがきてくれますしね」とにこやかに話す。気さくで人間味にあふれた、藤巻さんの人柄に引かれて、常連客の多い「ふじ寿司」。40台停められる駐車場や80名を収容できる2階広間も

あり、大小宴会に結納、お立ち振る舞い、法事などと幅広く利用されている。「出前やお客様の応対に文句も言わず、真面目によく働いてくれる」と従業員への気づかいも忘れない藤巻さん。

そんなご主人に、この春うれしい出来事があった。大学を卒業する息子さんが、後を継ぎたい、と申し出てくれたそうだ。「私も東京で6年ほど修行したんですが、その頃からもう30年も経っています。修行で新しい何かをつかんで来てくれれば…。何より下で働く人の気持ちもわかるようになってもらえればと思います」修行先は、藤巻さんが当時、習っていた親方に頼んで決めたというご主人の思いがしっかりと伝わり、早く2代目が一人前になって戻って来ますように。そしてどうか「ふじ寿司」が、末永く繁盛してゆきますように。

【DATA】

営業時間 11:00～14:00 17:00～21:30
定休日 木曜日
〒405-0025 山梨市一町田中21
TEL 0553-22-0729

おすすめは、特上ちらし1800円。
堅苦しくない、アットホームな雰囲気。レジアスによる送迎サービスあり、数人でも安心。10人以上のご利用は要予約。



ふじ寿司前で従業員と担当の内田さん

家族思いの ご主人が創りだした 温もりに満ちた家

小林 敏彦さん宅（甲府市）



甲府市愛宕山近くの風致地区。自然石の風合いを醸し出す、グレーの外壁が美しい二階。玄関から奥へ通されると、屋内に漂う明るさ、照明の光とは確かに違う明るさに、まず目が引かれた。明度が高く、清潔なイメージの色、白。それはその「白」で統一した天井や壁のせいだった。何となく心までもクリアになる家、それが小林家の第一印象だ。

トヨタホームの「メレーゼ・プレミアム」。1階にリビング&ダイニング、和室にバス、トイレ、家事室が、2階に

は主寝室と子供部屋、それに個室が配されている。全部で約48坪。新築したきっかけについてご主人の小林敏彦さんはこう話す。

「今年、高校生になる上の子が、いざ進学で県外へ出たりすることも考えると、家族で一緒に過ごせる時間を今のうちに大切にしたいと思いました。そのため、家の中で一番こだわった場所もリビングだという。床暖房を付けたリビングは「何しろ暖かい。快適なので当然子供たちもここへ集まってくる。ゴロ寝したり、ゲームを

したりして、冬も気持ち良さそうにのびのび過ごしていましたよ」ペアガラスは温まった部屋の空気を逃がさないようにしてくれ、同時に防音の役目も果たす。さらに気密性の高い室内には、エアナビ（ビュア24・24時間全館健康換気システム）がフル装備されていて、換気も抜群。「喘息気味だった息子も新居へ移ってから現実に咳が減りました」という。

「自動シャッターはボタン一つで力もいらずにすむので楽ですし、キッチンで仕事をしながら洗濯もできる家事室は、予想以上に利用価値がありました」と奥様も共に喜んでいる。家を建てるに当たっては実際にいろいろと展示場を見て回り、最終的にトヨタホームに決めたという小林さん。「営業の山本さんがとても誠意のある方でしたから」と振り返る。

警願寺の副住職であり、また警和保育園の園長でもある小林さんは「とにかく変に凝った家ではなくて、シンプルで飽きのこない家をと考えました」と話す。余計なものを削ぎ落とした、気負いもてらいもない清廉な精神の片隅に、一家の主としての、深い愛情を垣間見た気がした。



会いたい人から 会いたい人へ
知りたいことから 知りたいことへ
リレーでつなぐエッセイ

実体のある町について

清水 昭三

しみず しょうぞう

作家・山梨文芸協会会長



山村に生まれ育ったわたしが、今町とはなにかと改めて考えてみると、驚くことにわたしには語るべき町がない、ということに気がついたのである。

少年が山村から出て甲府や韮崎の町を通過したことはあっても、それらはすべて虚構の町の域を出ていないのである。今にして思えば、町とは少年兵時代にかかわった奈良の丹波市町であったり、茨城の小川町であったりするのである。それでありながら町の様子を54年間もはっきり記憶しているというのではない。

奈良のあの町ではテッテイ的に予科練教育を受けた。その心象風景は、今も生き生きと甦ってくるのである。町のたたずまいなどは、どこの町とも似たり寄ったりか、いや、それがまったく違うのだ。町の至る所に天理教の大きな建造物が点在しているのである。そのうえ戦時下にもかかわらず天理教の法被を着用した町の人たちが当然のように通りに眺められたことであつた。

海軍航空隊自体、そうした大きな建造物を遠慮なく接収して開隊されたであろうことは一目瞭然であつた。つまりかつて天理教によって丹波市町は

成立していたのに、1940年代、突如、この町は奈良海軍航空隊の町になってしまったのである。航空隊が町の中にあるのか、航空隊の中に町があるのか、摩訶不思議な町が、丹波市町なのである。

天理外語専門学校の広大なグラウンドで訓練を受けている練習生の反対側では、生徒達が野球を楽しんでいる。この珍風景は、国家総動員体制の戦時下、あつてはならない奇妙な共存をなぜか許していたことになる。

転勤先の茨城の小川町駅で軍用列車から降り立って見るこの町は実に寒々しい。町のメインストリートは、変哲もない田舎町にすぎなかった。一本の通りをただひたすら歩くのである。

左右の町並はいかに古ぼけて安っぽく、第一埃っぽいのが気にかかった。今や売るべき商品もない店が生氣を失って、ただ無目的にそこに突っ立っているのが小川町だった。

家並がなくなる辺りから、十間通りが突如目の前に開かれたのだが、アスファルトではない。隊員が巻きあげる土埃が災いし、目指す百里原海軍航空隊(基地部隊)の隊門が、歩けど

も歩けども前方に見えてこない。体中の汗で折角の第二種軍装も見られたぎまではない。この小川町は、十間道路の土埃をかぶった死の町そのものであった。

奈良丹波市町とは天と地ほども違うことが、すぐに了解されたのである。奈良には空襲はなかった。戦局は明日に迫っていながら、奈良は、学生の野球遊びが証明するようなどかな平和がまだちゃんとあつたのである。

寝静まると民家からのピアノの曲が兵舎内に聞こえてくることさえあつたのだ。

だが小川町は前線基地を持った町である。あの日配属作業も完了しないうちに、早くも敵機の執拗な攻撃を浴びたのである。

十間道路は、特攻機用の誘導路だった。8月15日早朝、神風特別攻撃隊第四御盾隊を「輻振れ」で見送った。その中にたった17歳の先輩がいた。

この日の昼、敗戦。

小川町と丹波市町は、わたしにとって実体のある町だと言えるが、他のすべての町はやはり虚構の町である。語るべきものがないようだ。

穏やかな笑顔の奥に秘められた 粘り強い闘志

トヨタビスタ山梨株式会社 甲府西店

課長 原田 俊二 さん(甲府市) 35歳



とにかく、無我夢中にやってきた

トヨタビスタ山梨(株)に入社して、今年で13年目を迎える原田俊二さんは、甲府西店の営業課長を勤めているが、この1月に本社主催の「メーカー表彰」を受けた。年間優秀賞をいただいたのは、全国では136名、そのうちビスタ店では15名で、原田さんは山梨の他、埼玉や千葉などを含む関東のブロック代表として出席した。

招待されたのは、名古屋市でもかなり大きいホテル名古屋キャッスル。表彰式の後に、懇親会を兼ねた夕食会が開かれ、そこでトヨタ自動車の奥田社長とも握手した。「メーカー表彰は、ブロック内のビスタ店で持ち回りによって代表者が選出されるので、今回はちょうどその番に当たったわけです」と謙虚にいう。しかし、実績がともなわなければ名前さえ挙がらないはず。それに幸運を招き寄せるのも実力のうちだ。昨年度1~12月の販売台数は71台、その前は99台という最高記録を出した。

景気はいっこうに回復の兆しをみせず、経済も冷え込んでいるというのに、新車販売の契約を結ぶのも大変なのでは? そこまで数字をキープ

していくのも難しいのでは? と聞くと「とにかく無我夢中でやってきましたから」原田さんは爽やかにそう、答えた。



支えてくれた人たちに感謝したい。

「でも、自分一人でここまでこれたとは思いません。直接的にも間接的にも、たくさんの人のお世話になっているんで

すし、陰で支えてくれた人がいてこそ、今の自分があるんだと思います」職業柄か、それとも人柄か、穏やかな語り口調にはつねに周りの人への配慮を忘れない、大人の余裕が感じられる。

結婚して8年目。奥様はともに人生を生きるパートナーであり、また良き理解者でもあるのだろう。営業は、お客様の都合に合わせて打ち合わせのスケジュールを決めるため、休日出勤も多いとか。夜遅かったり、休みも予定が組めなかったりで、家でゆっくり過ごす時間は少ない。もちろん、夫婦でどこかへ遊びに出かける機会も思うように持てない。それでも黙ってついてきてくれる奥様に「なかなか面と向かっては言えないけれども、とても感謝しています」と原田さん。

「やはりやるからにはいい成績を出したいし、表彰されることを目標に頑張りたいんですね」と話す。最後に、お客様をゲットする原田流の秘訣を聞くと「笑顔を絶やさないと」という返事が即座に戻ってきた。

これからどうかますます活躍ください。そして優しい奥様とも仲睦まじく。

[取材: 原田陽子]

おしゃれ

LA FUJIYA



営業時間 10:00~21:00
定休日 水曜日(月1回)
所在地 中巨摩郡田原町山之神
オギノリバーシティ内1F
TEL 055-273-8960



似合う色の相談も受けられる エレガンスな婦人服の店

ミセス物にはこれといったブランドがあまりなく、扱うお店も少ないのが現状だ。そんな中、45歳以上の女性をターゲットにちょっとお洒落な婦人服を販売しているのがこの「LA FUJIYA」。オギノリバーシティの一角に構える店舗には、シックでエレガントな商品ばかりが美しく陳列されている。

「開店して12年経ちますが、おかげさまでいいお客様に支えられています」と宮津店長。売り上げの7割が固定客で、他の店に立ち寄りずとも、ここだけにわざわざ足を運んでくれる方も多いという。売れ筋は上下やコーディネートで、59000円ぐらいから。サイズは13号まで揃え、色やデザインも豊富。

また、店長の奥様が文部省認定の色彩能力検定を取得しているため、色でお悩みのお客様は、適切なアドバイスが受けられる点も魅力。いくつになってもお洒落は女性の楽しみのひとつ。自分を生き生きさせるスパイスとして、ときにはお気に入りの服を身にまとい、気分も晴れやかに颯爽と出かけてみたい。

オリジナルワインが楽しめる 牧丘町の個性派な酒店



昨年の12月に新店舗が完成したばかりの「山田酒店」は、牧丘町の目抜き通りに建つ酒屋さん。自社で営む三養醸造のワインを販売するため、昭和7年にワイン屋としてスタートしたのが始まりだ。個性派な店の造りで、片方の入口から入ればカーブ(ワイン貯蔵庫)をかたどったワインショップへ、もう片方から入れば酒屋へ訪れた雰囲気になれる。また、店内奥には、試飲会や小グループの貸し席など様々なイベント用に設けられた純和風の部屋もある。「これからはお客様が来て楽しんで来ていただけるような店づくりをしなければ」と店主の山田健さん。その意気込みを現わすかのように、品揃えは実に豊富。つまみやインスタント食品、米や醤油も置いてあるが、やはり一番のおすすめは、自社オリジナル商品、巨峰の里ワイン(ロゼ 720・1600円)やキウイスイート(500・1000円)、まきお生ブドウ酒(720・1200円)など。牧丘産ならではの芳醇な味覚をぜひ一度、味わってみてはいかが。

営業時間 8:00~20:30
定休日 月曜日
所在地 牧丘町平235-4
TEL 0553-35-2108



お茶の間の民俗学(11)

—ふるさとの心と味(6)—

ぼたもちとおはぎ

春・秋の彼岸の行事食といえば、春の場合は「ぼたもち」秋の場合は「おはぎ」ということになっているが、近ごろではこの区別も曖昧となって、一様にこの種の行事食を「おはぎ」と呼んでいる傾向が強くなっているようだが、実は両者は作り方も形も違っている。

山梨では両者をその作り方で、「ぼたもち」の場合「みなごろし」と呼び、「おはぎ」の場合を「はんごろし」と呼ぶおもしろい表現があって、これも両者を区別する目安としている。それぞれ物騒な呼び名であるが、作り方とすればまことに当を得た呼び名である。

ぼたもち

正式には「ぼたんもち」である。春の彼岸の時の行事食で、このころ牡丹の花が咲きはじめるころであるから、この花に因んで名づけられたということと、その形が牡丹の花に似せて作られるところからの呼び名であるという。

これを「みなごろし」と呼ぶのは、シンになる部分を餅にしてそのまわりに餡をつけるので蒸した餅米を全部つきつぶすから「みなごろし」である。同じ「ぼたもち」でも外側に黄粉をまぶしたり、ゴマをまぶすものもあるが、これらは「黄粉もち」とか「ゴマ

もち」というべきであって、本当の「ぼたもち」とはいえない。

おはぎ

こちらの方は正式にいうと「はぎもち」である。秋の季節の行事食で、このころ萩の花が咲くのでその名が生まれたが、形も萩の花が咲き乱れているように、牡丹の花のようにひとつひとつ整った形でなく、シンになる部分の蒸した餅米を、餅のようにつくのではなく、手でつき潰して、まわりに餡をつけるものである。「はんごろし」と

呼ぶ理由は、蒸した餅米を半分つくものというところからきた呼び名であるから、シンの部分がツブツブしていることになる。

県内に残る笑い話につぎのようなものがある。

ある日、彼岸の供養のため甘いものが大好きな客が訪れたので、家の夫婦が何をこねたものと相談をはじめた。夫は「みなごろしがよからう」といったが、

志摩 阿木夫
しま あきお
民俗学研究者

かみさんは「いやあ、あの人は俺が悪いから「はんごろし」の方がよい」といって大声で話をしているのが、客の耳に伝わった。そこで客はびっくりして、こっそり逃げ出してしまったという話である。

「ぼたもち」にしろ「はぎもち」にしろ、このような笑い話の種になるくらいだから、古くからの行事食として人びとのくらしの中で、特になじみの深いものであったといえる。

牡丹餅の秘夜を分つ彼岸かな 子規



・大発生の記録

— 経済危機と天災との関係

・ニューヨークの画廊

— 恐麻薬的な魅力？



×月×日

アメリカのテレビ番組で「大発生の記録」という題名のドキュメンタリーを見た。

カリフォルニアの今年の夏には、虫の大発生を経験した。学生時代に大陸横断をしている時に、荒野のガソリンスタンドに立ち寄ったところ、よく見ると周辺一帯バッタだらけだったのである。店員は、「夏になるとよくあること!」と笑っていたが、もしもそれが農業地帯だったら笑い事では済まされなかっただろう。

古典的なレイチェル・カールソンの「沈黙の春」では、生態系に対する人間による影響(害虫駆除のため農薬を使ったこと)から、鳥の声が聞こえなくなった朝の恐怖の話があるが、実は逆の大発生の方が恐い。例えばすすめの大発生で農作物が被害を受ける例、イナゴの大群は古来より恐れられているし、ネズミはそれがもたらす疫病と共に恐れられ、「ハーメルンの笛吹き」というドイツの民話もある。そう言えば、ヒッチコックの「鳥」という映画もあった。

近年、裁定取引などの金融商品が高度な発達を遂げると共に、市場の不確実性や不安定性が増大した。アジアの通貨危機に引き続いてルーブル・ショック、中南米の通貨危機となり、IMFはその対応と、好調なアメリカ経済に余波が及ばないための

対策に躍起となっている。

実はこの恐怖が、大発生による天災に似ているような気がしてならない。

投資家の方々を、イナゴやネズミに例えているわけではないが、合理的な利益追求の投資活動が一時的な繁栄を享受している地域に集中し、大発生と似た状況を作り出し、何らかの出来事を引き金にして文字どおり危機的な「収奪」を引き起こしてしまう。個別の投資活動に悪意があるわけではなく、むしろリスクのヘッジ機能によって社会に貢献すると言う善意の見方が正しい。しかしながら自由市場は「情け無用」の世界である。予測が不可能に近く、回避が難しいから「天災」と呼ばれるのであって、現在の経済危機はまさにこの状況を呈している。

×月×日

ニューヨークに行った時、山梨県出身の芸術家、佐藤夫妻にお世話になる。ソーホーで長年創作活動を続けてきた夫妻は、アメリカでも有名で、成功した日本人芸術家の典型ともいえる。ちょうど夫妻の個展の開催初日で、3千ドルから5千ドルの手ごろな作品が飛ぶように売れていた。

ニューヨークの画廊は商業主義が高度に発達していて、画廊が引き受けるとまず

大丈夫と言ったニュアンスの話を聞いた。作家、画廊、顧客と言った関係において能力主義が行き渡っている。佐藤さんは「大学で同じクラスだった人で、ソーホーに残っているのは一人になってしまった」と言っておられた。

アメリカ社会では、「敗者と勝者」と言う図式が鮮明で、好景気中の現在、問題になっているのはむしろ所得格差である。年収数10億ドルから数千ドルの世界まで、日本では考えられないような開きである。好景気でもホームレスが多いし、ニューヨークの地下鉄のホームで彼らの姿をよく見かける。

しかし数日間ニューヨークに居て、ニューヨークの魅力を知ってしまうと、やはり離れがたい何かがある。冬は寒いし、治安もお世辞にもよいとは言えない。しかし、潜在的な「都市の力」がニューヨークには満ちていて、それには麻薬のような魅力があった。執念のようなものを感じる。地下鉄のホームでパフォーマンスをする大道音楽家達にもそのエネルギーが満ちている。そんな話を話していたら、佐藤さんの作品で山梨県立美術館が所蔵しているものが、穴の空いた地下鉄である聞いて驚いた。4月に日本に帰ったらさっそく見てみようと思う。

[文:杉村 聡]